

「重信房子さんを支える会(関西)」会報



創刊号

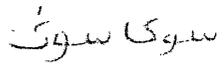
～さわさわは友情契る合言葉～

目次

سوسو
さわさわ

- 創刊の辞を述べるつもりが… 森本忠紀
- 私の京都・大阪物語 重信房子
- 大嶽秀夫著『新左翼の遺産』におけるブントの語られ方
………宍保ブントは《新左翼》だったのですか 千田 智之
- 『5.30 リッダ闘争 35 周年記念全京都メモリアル集会』報告
- 塀を越えて、歌声を届けよう 贈ります、この一曲『幸せつくろ
う』

【さわ】…「共に」「一緒に」を意味するアラビア語です。“さわ”一語でその意味がありますが、“さわさわ”と続けて言う言い方もよくされるそうです。音感が良いことから、会報タイトルには“さわさわ”をいただくことにしました。

アラビア語で右から  と書いて“さわさわ”と読みます。

創刊の辞を述べるつもりが…

私は自身の臨終に際して、私の人生とは何だったのかという問いが起きた時、生涯に経験した大きな出来事として日本赤軍を思い起こすことだろう。

日本人若者が義勇兵として外国へ渡り、革命運動を担うという日本の歴史でかつて例がないような事業をやったのけました。しかも、リッダ闘争と言う期を画する闘争を闘い切ったことで、パレスチナーアラブ世界では、その貢献によって、大歓迎され、以来ずうっと英雄視されている。そして、日本と没交渉で、日本を忘れて運動していたのではなく、絶えず日本への還元、日本とパレスチナとの連帯の闘争が追求されてきたということ、私は日本赤軍をそのようにみなし、それが稀有なことと思っています。

それにしても日本赤軍の当事者メンバーでもなく、赤軍派だったわけでもないこの私がなぜでしょうか。

なぜなら、日本赤軍は日本の1960年代、70年代闘争を抜きにしては考えられず、元をたせば、新左翼の運動から生まれたものであり、当時、新左翼学生のはしぐれにいた私は、広い意味で日本赤軍の昔の仲間の一人だと自分のことを思っているからです。

重信房子さんは絶え間なく、石礫を雨霰と投げつけられています。言うまでもなくそれは検察によって無期刑を求刑され、今年、懲役20年の第一審判決を下された裁判のことです。このような権力による攻撃に加えて社会からも手ひどく排斥されています。

昨年、6月3日、重信メイさんのお話を聞く集いを催しましたが、会場は法然院を予定していましたが、ところが、「重信」の名前が出た途端、借りることを拒否されました。対応して下さったお上さんは穏やかな丸みと、細やかな気配りが身についた、今も好印象が残っている方です。

このような、社会から投げつけられる、目にみえない石礫はある意味では権力よりも過酷ですが、本当は反対ではないでしょうか。重信房子・メイ親娘のような輝く人間像は滅多に見られないものだからです。お二人の

間の愛と信頼の絆は現代という、ヒューマニズム崩壊が顕著な時代にあつて、それだけ取り上げてもどれほど貴重であることでしょうか。

それが目に見えるものであれ、見えないものであれ、重信さんの前に立ちただかつて盾となり、重信さんに投げつけられる石礫を防ぎたいと私は願わずにはおれません。

石礫をわが身に投げよと言う私の言葉に、もちろん嘘、偽りはありません。2003年から重信さんの裁判の傍聴に東京まで通うようになったのもそのような気持ちからでした。だが、本当に石礫を投げられて死にそうになったら、私は逃げないだろうか、あるいは、怖くなって逃げ出すことはないだろうか。

あり得るということを私は自分のこととしてはっきり言うておかなければなりません。私は重信さんに向かって投げつけられる石礫を自分に投げよと言いたいと思います。けれども、それでたとえ私が死んでもと言い切ることはできません。反対に私は逃げるかも知れないという言葉を加えなければなりません。

ここまで読まれた方はきっと戸惑いと疑問を覚えられるに違いありません。けれども私は聖書中のあの有名な場面を思い出します。すなわち、イエスが捕縛された時、一緒にいた使徒のペテロはイエスのことを三度聞かれて、三度知らないと答えました。私の恩師の村田さんと言う人が、もう30年くらい前になりますが、このことに関して述べられた、人間とは弱いものだ、そのように弱いのが人間だという言葉思い出します。

私もペテロと同じ様な立場になったら、「知らない」と言うだろう。ペテロはその後、泣いた、この、泣くのが人間だと村田さんは言われました。

私は連合赤軍事件を思い出します。連合赤軍の過ちも人間の弱さだと思います。連合赤軍事件を知って、重信さんは泣いた。そして、同じ弱さを自分自身と日本赤軍にあるものとして認めた。そのように、弱さを認めることで前へ進むことができ、しぶとく活動してこられたのじゃないかと私は思っています。実際、重信さんが今、生きておられること自体、奇跡だとしか私には思えません。

私の場合はそんな風にはいきません。私も連合赤軍の弱さを自分にある



ものとして認めています。しかし何しろ類い稀なる鈍感力の持ち主です。生きる意味とは、探して見つかるもの、誰かが教えてくれるくらいに考えていた甘ちゃんですから。

私は鬱という持病を持っています。鬱になると、それまでの人生から滑り落ちます。自分と他人、自分と世の中との繋がりをなくしてしまいます。考えるのは死ぬことばかり。何とか痛くないように死ねないものかしら、そんなことばかり考えます。周期性の鬱ですから、回復すると、死にたいというようなことなどすっかり忘れてしまいます。

こうなると、私が臨終に際し思うのは鬱でしたね。前言を撤回しなければ。鬱は何と言っても私の影みたいなもので、私が死ぬまでずっと私と一緒にですから…。

さて、話を「支える会(関西)」に戻さねばなりません。先日、6月3日の設立集会には200人もの人たちが集まってくれました。それからどう展望するのかと聞かれると、私は答えられないので困ってしまいます。この「支える会(関西)」は皆さんのお力で設立することができましたが、「会」を店舗に例えれば、店舗を皆でやることは嬉しく、有難いが、私は屋台向きの人間です。大阪でホルモン焼きの屋台を15年間やっておりましたが、店舗を持ちたいと本気で思ったことは一度もありませんでした。

こんな私が、店舗に入ることが許されるなら、私は屋台をやりながら、屋台をやることで、と言う風に店舗がやれたら有難い、こう思っています。

「創刊の辞」を書くつもりが大脱線してしまいました。会報に出してもらってよいものやらよくわかりませんが、もしこの文章が皆様の目に触れるようなことがありましたら、ご批判、ご叱責、いかばかりかと恐れと期待あいなかばしております。

最後に、下手な俳句を一句捻って結びといたします。

贈ります夏の夜明けのこの清さ

森本忠紀



私の京都・大阪物語 (1)

重信房子

関西の会報を出すので、京都や大阪の思い出など、人々の出会いを書いたらどうか？と提案を受けて、そんなことを気ままに書くことにしました。

私にとって今から思えば、人生の岐路は、69年だったと思いますが、丁度そのころから関西とも縁ができるようになりました。

69年は、1月に東大の安田講堂の攻防戦があった年です。そのころの私は、社学同というプントの学生組織の一員でしたが、まったく、学生自治会の活動の枠を超えるものではありませんでした。

私は高校を卒業してキッコーマンに就職し、その後、夜間大学からでも先生になれると知って先生になりたい一念で、通勤に便利な明大に入りました。そして、そこで、学生運動に出会ったわけです。

69年、赤軍派ができるのは7月の、「7・6事件」のいざこざからですが、当時、同じ69年の数ヶ月前には、党派専従活動は思いもよらないものでした。

私自身、69年1月の東大闘争の時には、丁度教生で、東京の区立中学校3年の社会科の実習をしていました。教育実習は楽しいものでした。私の担当は社会科社会だったので、「天声人語」の討論会をやったり、丁度、東大闘争についても中学3年生と議論しました。そのころの「天声人語」に東大闘争の安田講堂の立てこもりを批判して問答無用のやり方は小学生以下だと、学生のやり方を批判した文がありました。「小学生以下の大学生はやはり考えられないから理由があつてあせざるを得ないのではないかと」と、中学生が新聞や大人たちを批判しつつ、大学生の求めるものを知ろうとするのが印象的でした。そうした毎日やりがいのある時間であり、活動に忙しくても両方やっていました。教生をしながら、授業が終わると大学の自治会に戻ります。そのころ東大闘争支援の御茶ノ水一帯のセンターとして明治大学では盛んに活動していました。私もそのうちの一人でした。69年3月には、史

学科を卒業して4月、政経学部に入りなおしてまだ教職を目指していました。

そのころ丁度、4・28闘争の準備が始まります。当時いつも先頭で闘っていた明治や早大や中大の仲間たちが東大闘争で大量に逮捕されたので活動家が少なくなっていたようでした。関西から来ていた元プント議長のSさんから、4・28闘争の書記局的な活動を手伝ってほしいかと頼まれました。当時、明治の学館を拠点にして関西プントの人々が活動していました。いつも私たちの二部のサークル、現代思想研に気軽にあれこれ頼みに来るのです。それで引き受けました。これが私の初めての大学を離れた党派的なかかわりでした。それでもほんの手伝い程度です。そのころは「先生になる」ことを考えていたし、また友人たちと楽しんで学生生活をしているうちの一人でした。

丁度、4・28闘争準備の合間の3月か4月のそのころ、友人の音楽活動の手伝いに付き合っ始めて京都に行きました。そのころ京大ではバリケードが、まだ維持されていて、「バリ祭」の最中でした。「バリ祭∞」の、無限大のマークの立看がたっていました。

ちょうどそんなとき友人の一人が京大のバリ祭に荒木一郎という歌手が10万円だったか、金を取って歌ったという話を聞いてきました。「けしからんな、学生から金を取るなんて」ということで、飲んでいた気ままな私たちは、「学生には連帯して歌うべきで、金をもらうべきではない」と結論に達して意気さかんでした。「よし、歌の連帯を勝手にやろう！」ということになりました。翌日、高石友也が先に言って弾き語りを始めました。雨が降り出した中、大勢の人が集まり、西部講堂に誘導されて、他の歌手加藤登紀子も歌いました。「私たちは連帯のために来た！」仲間のようにお互いに意気投合し連帯し、ひと時を祭りのように楽しみました。私も、「4・28東京で会おう！」と訴えました。そんなことがずっとできた時代だったのです。(これは後日談があつて、この時名乗りもしなかった私を、バリ祭の一人が覚えていて、70年代に中東で再会しました。彼は在欧の日本人たちの反戦グループの一人でした。後に逮捕され、バリ祭のことを話したので、法廷で、検事から今頃、バリ祭のこと、歌手たちとの関係まで聞かれてしまいました。)

この時の京都の連帯ツアーは痛快でした。どこに行っても連帯し友達になれる、そんな大学の相互の交流は日常的でした。私は東京で過ごすように京都で過ごし、又東京にもどって4・28闘争にかかりました。その、4・28闘争の書記局といっても、たいしたことはないのですが、手伝いました。

書記局として借りた事務所でブントの元書記長、前書記長、現書記長が、時々論争していました。「情勢はこうである。だからやろう。」「だからやめよう。」とにかく4・28の闘い方を武装闘争にレベルアップすべきか否かという話でした。結局、武器は使わないという結論だったようです。後に赤軍派になった69年秋、新米の私の素性を知る目的で、私はこの4・28闘争によって別件逮捕されました。大菩薩峠事件の時です。その時の罪名が「4・28凶器準備補助」で、私がナップザックを大量に購入したことが凶器準備というので笑ってしまいました。ナップザックに学生が投石用の石を入れたということで。その4・28闘争の総括をめぐって、「4・28は敗北だ。党の武装こそ行すべき」という人々が、後の赤軍派をなす人々の主張でした。

私は4・28の新橋や銀座の街頭デモの闘争に「ロシア革命の時はこう」「トロツキーはこういった」「レーニンなら二月革命がどうの」ということにさっぱり関連づけられず、あまりそうした論に興味もないままでした。それでも大学に戻り誘われるままいろいろ協力してきました。後に赤軍派となるその人々が、住むところも食べるものも満足にないのに、もっとも真剣にがんばっていたから、助けなくちゃというのが、日々、学館で顔をあわせていた明治の私たち現代思想研の心情だったでしょう。

こうして、赤軍派のフラクションに誘われて参加していくようになりました。直接誘ったのは関西から来ていたTさんで後に私の親友で、「連赤」で命を奪われた遠山美枝子さんの夫となった人です。こんな風に関西の人々とつながり始めて、赤軍派に新しい闘いの活路を見出すようになっていきました。当時はまったく理論的政治的に無知でしたし、理解していたとはいえません。やる気が一番ありそうな赤軍派に人脈的にもつながりがあって結集したというレベルです。

このころ『7・6事件』が起きました。この『7・6事件』とは赤軍派フラクの者たちが、「ブントの現指導部が赤軍派を除名しようとしている」と彼



らに自己批判を迫るために、会議に殴り込みをかけるものでした。その混乱で、ブントの当時の議長で破防法攻撃で指名手配中だったさらぎ議長を負傷させて、介入した権力にさらぎ議長を逮捕させてしまった事件です。また、直後、こちらもブントの他の勢力に襲われ塩見さんらが中大に拉致されてしまったのです。

この7月6日の事件によってすべてがおかしくなっていました。

今から考えれば意見の違いを認めないこうしたあり方が「プロ独」や「我々こそ絶対正しい」という「党の無謬性」を盾にした間違った自己肯定であったことはわかります。そしてそれらは後に「連赤」の中にも持ち込まれた当時の新左翼が持っていた弱点であり過ちでした。しかし、「7・6事件」当時は赤軍派もサバイバルに必死でした。そしてまたみな感情的に自己肯定し相手の非をより大きいと思う分、赤軍派もさらぎ議長を逮捕させてしまったことを自己批判提起しながら分裂は広がるばかりでした。

塩見さんらの拉致された後の残った赤軍派の指導部はいったん全員関西に撤退することに決めました。東京の活動しか知らない私や明治の仲間たちは夜間大学労働者でもあり、「日和見といわれようと職場の組合を第一に考えたい」と、東京にとどまりました。私はいまさら、大学に戻るのには仲間の窮地を見捨てるようでまずいかなと、さらに一歩党派活動にふみこみました。

「関西に行く」この時の決断は、私が大学や、教職をやめて、革命の道に進む同義語だったのだと、のちに気付きました。当時はただやむにやまれぬ闘いへの結集のように思いました。そして7月下旬かもう8月に入っていたのか、関東学院大学の根城を後にして夜汽車で、関西へと向かいました。23歳の夏です。

(つづく)



大嶽秀夫著『新左翼の遺産』におけるブントの語られ方

………安保ブントは《新左翼》だったのですか

千田 智之

過去に執着するなと現代世界——つまりは、今では最強のイデオロギーであるグローバリズムだが——は、新たなタブーを設定する。では、《学問》だけが過去を取り扱う特権を主張できるのか。大嶽秀夫の「政治学」を学問と言うならば、彼の『新左翼の遺産—ニューレフトからポストモダンへ』（東大出版会刊）もまた学問として受けとめなくてはならないのだろうか。六〇年安保闘争が今でも何らかの——ということは、肯定的或いは否定的なコノテーションを問わないということにおいて——記号或いはシンボルであるかも知れないことを除いたすべての意味において、既に「過去」であると言われて反論する根拠はもとより何もないのは事実だろう。いみじくも西部邁は、もう十年も前のことだが、安保闘争とブントの経験を回顧して「センチメンタル・ジャーニー」と表現した。だが、ノスタルジアに真理は存するという哲学者がいたとしても、それはいうまでもなく学問ではない。また、思い出も歴史ではないといっておこう。

※グローバリズムが直接に国内のネット社会における「左翼」への蔑視或いは揶揄と関係はないとしても、ブログやスレッドにおいてサヨとかサヨと呼び慣わす傾向は一体何に因るのか。匿名ないし無名の比較的若い人々が左翼的或いは左派的な言説——たとえそれらがステロタイプなものであったとしても——を軽侮し、罵倒するのは見るに見かねる。気分や雰囲気と言ってしまうればそれまでだが、政治への批判的言説や真っ当な議論が成立しない土壌がネット社会——要するに、大衆的な言論の場の一つなのだろう——に広がるのは危惧される。それもまた「新左翼の遺産」なのかと。「何の強制もなく『自由に語る』ことを目指した全共闘による秩序の破壊は、結果的に、相手の言うことを聞かないで（あ

るいは耳を塞いで）しゃべりまくるポストモダンの文化を創り出してしまった」（仲正昌樹著『ポストモダンの左旋回』世界書院刊）などという素っ頓狂な意見もある。

本書の後書きにあたる「短い自註」によると、本書は「京都大学大学院法学研究科『二十一世紀COE・二十一世紀法秩序形成プログラム』の研究成果の一部である」とのことだ。続編があるのかも知れないが、何よりも学術研究として書かれたものであると、著者自身が考えていることが知られる。

もち論、学術書だからといって体系的に記述されなくてはならないということはないだろう。本書は、五〇年代末から七〇年代半ばに登場した「世界的現象としての新左翼」から説き起こして、「日本における新左翼運動の誕生」（第二章）に触れ、安保闘争とブントの生成から解体を主に分析・記述したと思うと（第三から第五章）、ある意味では唐突に「新左翼思想家としての清水幾太郎」（第六章）と「ポストモダン思想家としての谷川雁」（第七章）が独立して取り上げられている。なる程、安保闘争における諸群像の中で全学連執行部＝ブントに近い思想家として、清水と谷川は際立ってはいようが、人物選択として恣意性は否めまい。本書の「序章」において、わざわざ「初期新左翼思想の分析に関しては、本格的な吉本隆明論が欠かせないであろうが、この難解な思想家の分析は、政治哲学の専門家に任せたい」と特記されているとしても。大嶽なりに六〇年安保期の吉本を「政治学」的に分析することが余程難解であると思えない。

いずれにせよ本稿は、表題の「学術書」の書評ではない。筆者は、仲正昌樹が何と言おうと相も変わらず「何の強制もなく（しかも、耳を塞ぐことなく）自由に語ることを目指し」ているので、筆者の関心は、安保ブントとはどのように語られる存在なのかにある。大嶽は自ら、六〇年代前半期の新左翼的雰囲気を駆け抜けたと「短い自註」で吐露しているのだから、決してブントの同伴者ではないとしても、まさに同時代人なのだ。そこで安保ブントはどのように語られたかについてのみ取り上げる。

結論から言うと、ここで語られた安保ブントとは「新左翼」とは思えな

いのである。本当の(?)安保ブントが何であったのかなどということは、筆者にとっては今更何をであって、大嶽秀夫の取り上げた「安保ブント」って「新左翼」だったのが、本稿のテーマである。

そうするともち論、新左翼とは何か、ポストモダンとは何かという「定義」を明確にしなくては議論にはならない。大嶽とは異なる定義を持ち出すのは文脈的にフェアでなくなるから、ここでは議論を全くする気はない——お互いに議論の相手ではないことを、こちらは百も承知している——けれども、本書の定義を援用しておくことにするが、安保ブントのポストモダニズム的要素については残念ながら触れる紙幅がない。本書の分析の方が余程ポストモダン的であるように思うのだが。

しかも、肝要なことは、誰であろうと自らが経験していない過去の状況を語るには、様々な文献資料(テキスト)に依るほかはないことである。大嶽も本書の巻末にもち論「参照文献」を多数列挙している。その選択を云々しても始まらないのだが、気になるのはそれらのテキストは何らかの意味で相互に結びつき、或いは影響を与え合っていることである。特に、本文でもブントが遭遇した政治過程に関しては、当事者たちが三十年或いは

四十年近く後に書いたものが「証言」として引用されている。「思い出」のなかに何かを求めることは本人にとっては何ら間違いではない。しかし、そのような資料的に二次的な文献では、そこで既に、過去の事実や認識或いは体験がテキスト化されることにおいて政治性が生じていることに思い至らざるを得ない。読者はそこに盛り込まれた多数のテキストの複合体を「経験」するのだろうか。それらのテキスト選択のクライテリアが明らかではないとすれば、しかも、取り上げられた「政治組織」のメンバーたちが成功者や勝利者の「自伝」を書いたのではないとすれば、過去の政治行動に対する視点は明らかに当時とは異なる、彼ら自身の思い入れ——それは錯覚や錯視かも知れないし、或いは誇大であったり卑小であるかも知れない——に満ちていることだろう。

※「この文章を書いている現在、あの時期からすでに二〇年以上も経っ



ており、しかも、それは人間の記憶にとってはなほだ厄介な激動の年月だった。それゆえ、ここで語られていることが、実際に起こったことをどれほど正確に再現しているのか、そういう心配が生じるのも無理はない(レフ・トロツキー著『レーニン』光文社古典新訳文庫、原著一九二四年刊)という自戒は大事なことだ。なぜなら「今となっては、いったいどこまでが回想で、どれが後から無意識になされた再構成であるのかは不明である」(同)からなのだが、こうした自省を読むと、トロツキーは一流の著述家に備わるべき明晰な心理学を心得ていたことがよくわかる。

いずれにしても、本書は歴史書ではないのだから、テキスト選択において歴史的評価は不要かも知れない。それ故に、そのテキスト選択そのものが政治的なプロセスだと言える。何故なら、本書が参照しているテキストの集積として、本書の安保ブントに関する記述と分析が何らかの実体性を与えられているからだ。つまり、安保ブント自体は今や存在しないものとして、凍りついた「過去」かも知れないが、それを採り上げた本書は、現代的に何らかの政治的な実践の一つ足りうるし、即ち単なるテキスト化だとしても政治性を帯びるはずだろう。しかし、このことは措いておこう。

では、「新左翼」とは何か。本書では、「歴史的に言えば新左翼とは、社会民主主義とスターリン主義の双方を批判しつつ、かつ自らを『真の』左翼と自認し、社会主義ないしはリベラリズムの刷新を求めて『長い六〇年代(一九五八～七四)』に登場した①思想、②政治運動、そしてその両者と密接な関連をもつ③文化運動・文化現象の総称である」とした上で、その思想と運動に限り、前期新左翼(一九五八～六五)と後期新左翼(一九六五～七四)とに時期区分される。ちなみに「後期のピークは、一九六八/六九年におけるベトナム反戦を争点とした街頭闘争と大学改革・解体をスローガンとした学園闘争との二局面をもつ点で、全世界に共通する争点である」と述べられている。これらのことはそれ程目新しい分析ではない。

では、本書の安保ブント分析において何が目新しく感じられたかというキーワードを並べると、「祝祭」、「ネオ・マルキスト的発想」、「実存主義



的ニヒリズム、或いは、行動的ニヒリスト」である。これらのキーワードを軸にして本書を読み直すと、安保ブントは、反スターリン主義を標榜し、真の革命家を自認したとしても、大嶽の言う左翼でもなければ、新左翼でもないということが判る。

大嶽は、安保ブントの性格を①反権威主義、②享楽性の二点にまとめ、また、その理論の特徴を①日本資本主義の復活、②労働者至上主義の否定としている。これらについては様々な意見や批判もあり得るだろうが、本稿のテーマではないので、詳しくは触れない。但し、これらの分析の前提として大嶽は、本書の随所に「島を唯一の接着剤としてブントが成立したのであり、ブントは彼の調整力とカリスマに大きく依存して出発したことを意味している」とか、或いは「ブント指導部は、国会に突入して何をやるのかについて、明確な展望をもっていなかった」とか、さらに「既に安保闘争の最中にも、島成郎はブントの最高責任者として、安保闘争が真の政治的危機を生んだ際にどう対処すべきかの展望をもてないことを自覚して悩んでいた」と述べている。これらは、島成郎自身の回想などを根拠に述べられているのだが、底流にある大嶽の主張は、ブントのリーダーたちがいかに革命の可能性を信じ、自らを「あらゆる意味で鍛えられた真のプロフェッショナルな革命家」（六〇年四月のブント第四回大会における島成郎書記長のアジテーション）と称しても、所詮は学生細胞あがりの「フルタイムの活動家」に過ぎないと認識に基づいている。

さて、ある種の政治運動やその一時的な昂揚を「祝祭」というのは、別段大嶽の専売特許ではない。彼の言う「後期新左翼」の全共闘の一部では、大学をバリケード封鎖した端から「バリ祭」が企画され、「おかげまいり」的雰囲気を用意したつくりとした者もいた（それを大嶽は非合理的な「狂気」だという）。それはいいとしても、本書では「祝祭」は、「ブントができたことは、保守化し、日常世界に満足し始めた労働者に対して、革命のロマンを維持させ、祝祭としての革命を一時的に開花させることでできなかった。どこまで意識的であったかは別として、それは先進各国の（構造改革派など穏健な新左翼は別として）ラディカルな新左翼に共通する戦略であった」とか、「[国会構内に突入した学生や労働者は]一ときの『祝祭』

に酔ったということであろう。ブントの戦略は、こうした『祝祭』をさらに拡大し、全労働者を巻き込むことにあったとってよい。しかし、この『祝祭』から（権力の変動たる）『革命』をどう導くかについての戦略がブント指導部にあったわけではない」とかというフレーズで使われているのである。この用語には明らかに意図的な政治性が感じられるのではない。目的意識的でないものを「戦略」というわけには行かない。好意的に取れば、安保闘争の大衆的昂揚を単にその言葉で表しただけなのかも知れない。しかし、「当時まだ二七歳であった島には、ブントの体質であった浪漫主義、理想主義の雰囲気がいかにじみでいた」とか、「ブントの活動家もつ任侠の世界に通ずる古風な感傷と美学」という表現にも共通する主張がある。つまり、この点に関しての大嶽の結論は、六〇年前後の日本は高度成長の時期で、多くが社会のエリートとしての地位を約束された東大生や早大生であったブントは「逃れようもない抑圧を受けていたわけではない」のであって、「もし『抑圧』もないのに革命を求めるとすれば、それは純粋に『祝祭』の欲求でしかない。これは革命運動の墮落なのか。しかし、彼らには『危機』の予感があった。後知恵でその誤りを責めるわけにはいかないが、結果的には誤った予感でしかなかったのである」というところにある。

次いでよく分からないのが、「ネオ・マルキスト的発想」なる規定である。大嶽が何をもち「ネオ・マルキスト的発想」としているかを見ると、「先進国労働者の政治的保守化の現状から、中核的労働者の特権化、マイノリティの差別と搾取、あるいは発展途上国の貧困と先進国との格差という、高度成長によっては解決されない、あるいは高度成長が格差を増進させているという、日本あるいはさらに先進国に共通の問題の存在に対する認識」、この認識をもたした発想をそのように言うのである。このいったいどこがネオ・マルキスト的なのか。しかも、この発想は、「同時に、新左翼にとって最後まで（社会全体についての認識上の）躓きの石となったことも否定できない。かれらの孤立と破産（例えば浅間山荘事件）は、その帰結であった」と言う。何故、ネオ・マルキスト的発想が「躓きの石」にならなくてはならないのか。このような「認識」は獲得したが、その認識や発想に適切な政治行動が提起され得なかったという文脈なら、まだ理

解も可能なのだが、発想が躓きとなり、孤立と破産を帰結させたなどというロジックが成立するはずがないではないか。

付け加えるならば、「英米のようなマルクス主義の伝統の弱いところでは、六〇年代後期に至ってむしろマルクス主義の輸入が始まり、ネオ・マルクス主義が誕生して、それがまた日本やフランスなどともともマルクス主義の伝統の強い国にも逆輸入されるなどして、新左翼運動におけるマルクスの強い影響は七〇年代半ばまで続いた」とも述べられている。なる程、大嶽は「前期新左翼」と「後期新左翼」の連続性と非連続性とを分別する文脈でこのように述べてはいるが、ここで言うネオ・マルクス主義と先に指摘した「発想」とはどんな関係になるのだろうか。例えば、前掲の仲正昌樹は、「六四年以降に台頭してきた（ヨーロッパから輸入された）『マルクス主義的左翼＝新左翼』は、『プロレタリアートの解放』などという形而上学的な命題を掲げ、行動の“ラディカルさ”を追求するだけで、ほとんど具体的な成果をもたらしていない」と指摘しているが、実はこれは日本のことを述べたのではなくアメリカのことだとしても、「世界的現象としての新左翼」という文脈においては、平仄は合っている。そうすると、「ネオ・マルキスト的発想」が安保ブントに見られたというのは、論点の先取りとなり、要するにこじつけではないか。もっとも、だから「的」と表現されているのだろう。

なお、思想史的課題かも知れないが、五〇年代後半には、ハンナ・アレントが名著『人間の条件』（ちくま学芸文庫、原著一九五八年刊）において「以下の章ではカール・マルクスが批判されるであろう。これは不幸なことだ。というのも、かつてはマルクスの思想と洞察の大きな宝庫から公然隠然と多くのものを借りて生計を立てていたあれほど多くの作家たちが、いまでは、職業的な反マルクス主義者になろうと決意しているのだから」と記していることを証言としてあげておこう。また、筆者の印象としては、ネオ・マルクス主義とは、ソ連崩壊・冷戦体制終焉後の九〇年代末に「これまで一方的に斜陽であった『マルクス』関係の研究書が再び世の中に出回り、影を潜めていた左派的論客たちがマルクス専門家として再登場してきて、ちょっとしたマルクス・ルネッサンスの様相を呈した」（仲

正昌樹、前掲書）ことの方が相応しいように思われる。ついでに記しておく。「カール・マルクスに対する支持がふたたび広がっている。イギリスのBBC放送は2005年に史上もっとも偉大な哲学者はだれであるかについての世論調査を行ったところ、多くの人々の予想に反し、また保守派をくやしがる結果が出た。最高の票数を獲得したのはほかでもないカール・マルクスであったからだ」（カレル・ヴァン・ウォルフレン『日本人だけが知らないアメリカ「世界支配」の終わり』徳間書店刊、原著二〇〇七年刊）というエピソードもある。これは多分複数回答方式によってコンテストの論理が働いただけのことだろうとは推測される。

しかし、もっと分からないのが「実存主義的ニヒリズム」とか、「行動的ニヒリスト」という規定である。これらの規定は、本書では「結章 国際比較と国際的影響からみた日本の新左翼」の「2 活動家の思想上の特徴」で基本的に取り上げられているのだが、それだけでなく随所にブントの主たる活動家個人の性格や読書歴などに触れる記述にも現れる。例えば、「第二章」の「3 ブントと全学連指導部のパーソナリティとリーダーシップ」には、「唐牛は、高校時代にサルトルを読んで『実存的人間』という小論を書き、北大のフランス文学を専攻するつもりであった。……周りにはアンドレ・マルローを読むことをいつも勧めていたという」調子だ。なる程「フランスからの影響は、既に敗戦後間もなく、とくに一九五〇年前後から、フランスのレジスタンス運動が広く紹介されたことに始まる。しかしレジスタンス文学以外にも、フランス文化は映画や小説、哲学書を通じて日本の学生たちの間に広く影響を与えた」のは、筆者には単なる流行としか思えないが、事実だろう。としても、それをもって「国際的影響」があったと評価し得るだろうか。ブントの指導的な活動家たちがカミュ、サルトル、マルローを読んでいたとして、彼らの政治的方針や行為の原因や理由と見なすべきだろうか。「アラゴンやマルローなどのフランス文学の影響が学生党员に限られず、高等教育を受けた共産党员にも広く存在していたこと……逆言えば、日本共産党にとっては実存主義こそが（近代主義と並ぶ）克服すべきイデオロギーとなったわけである。これが逆に、反日共系活動家がサルトル、カミュ、ニザンら、フランス共産党と微妙な

関係をもったフランス知識人の影響を受けた理由でもある」とまで言われると、ポストモダニズムにおけるフランス思想の潮流に無理矢理結び付けたいのかと思ってしまう。

大嶽はブントの性格について反権威主義を挙げたことは既に触れたが、その点について「そのアナーキーな直接行動主義は、あらゆる権威の否定へと進む傾向をもった。それはまた、組織一般を否定するような傾向すら内在させていた。この点からいうとブントは、アナーキズム的運動であったということも可能である。事実、ブントのリーダーたちにはアナーキスト的性格をしばしば指摘される」と述べている。また「ブントにおいては、本格的ゼネストが最大の政治的武器となるという（アナルコ・サンジカリストたる）ソレルの思想が、自覚的ではなかったにしろ強く信奉されていたように思われる。この『否定』『破壊』を徹底させることは、ある意味で『建設』を断念することでもあった。そこにアナーキーなニヒリズムの影が宿ることになった」とも言うのだが、なるほど、リーダーの誰かがソレルの『暴力論』くらいは読んでいたかも知れない。しかし、これらは単なるラベリングの域を出ない規定ではないか。だから「結章」の結論部分で『行動的ニヒリスト』たちは、絶えざる行動によってしか、ニヒリズムが精神を腐蝕させる過程を（一時的にせよ）抑制することはできない。彼らのエネルギーな活動は、そうした無気力状態に陥ることの『不安』によって生み出されていたのである。島や唐牛のせっぱ詰まったような行動主義には、そうした要素が認められる」と述べられると、この条を読んでいた筆者は思わず仰け反ってしまった。これはどんな心理学なのかと。同じことだが、「唐牛によって全学連はブランキズム（「行動の激しい逸脱性と破壊性」）を徹底したのである」とまで言われると、大嶽政治学は、個人の主観や感性を過大に評価するようにはしか思えない。誰であっても、何らかの政治的行為を心理的に解釈してみせることは可能であろう。そして、そうした心理的解釈の行き着くところは「実存主義的」表現を伴うディスクールでしかないだろう。それで何が証明されるのか。それは、本書の場合、つまり安保ブントとは左翼でも、新左翼でもないということになってしまうのである。

以上で本稿の冒頭に掲げたテーマについては語り終えた。だが筆者は、何も本書を全面的に否定するものではない。ある種の期待をもって繙いたのだが、もう少し分析の筆を進めて貰っていたらと残念に思う所も散見された。それはつまり、こうした政治学的な分析の対象として「安保ブント」は依然としてあるのだとの確信が得られたということである。そして、多分そのことは過去の問題ではなく、きっと将来に結びつく課題たり得ることなのだ。もう引用するのも煩わしいので、簡潔に記すと、大嶽の言う「後期新左翼」の悲惨を乗り越えるためには、必要なのは優れたリーダー（たち）やそのカリスマではないこと、分派闘争や内ゲバを結果させない政治的議論の仕方を手に入れること、つまり集团的集合的意志決定のイノベーションを獲得することなくしてはあり得ないことが理解される。戦争であれ、革命であれ、歴史的な事件を特定の個人やグループが引き起こし得ると考えるのは、言うまでもなく浪漫主義であり、理想主義なのだ。

ハンナ・アレントはどの著書もエピグラムとエピソードの宝庫であるが、中でも『革命について』（ちくま学芸文庫、原著一九六三年刊）には、出典はかなりあやしいのだが実に印象的な条がある。「『革命』という言葉がはじめて、復古的な回転運動の含みをもたずにもっぱらその不可抗力性だけが強調されて用いられた正確な日をわれわれは知っているし、知っている」と信じている。／この日とは、一七八九年七月十四日の夜のことであった。この日の夜、ルイ十六世は、パリでラ・ロシュフコー＝リアンクール公爵からバスティーユが陥落し囚人が何人か解放されたこと、民衆の攻撃の前に国王の軍が敗北を喫したことなどを聞いたのである。この王と使者のあいだにとりかわされた有名な対話は非常に簡単なものであったが、非常に示唆的である。王は『これは反乱（レヴォルト）だ』と叫んだという。するとリアンクールは王の誤りを訂正した。『いいえ陛下、これは革命（レヴォリュション）です。』革命なのか、反乱（叛逆）なのか。それは為す側の問題なのではない。それを受け取る側の問題なのである。

『5.30リッダ闘争35周年記念全京都メモリアル集会』

—2007年6月3日(日)京大西部講堂)報告(5.30とは我々にとって果たして何だったのか? その再びの検証と追憶の試み…

1. 報告・当日の様相 (※ 既に「オリーブの樹」に掲載されたものを一部改訂)

京都をはじめとする関西の仲間たちが文字どおりに一堂に会した感のある素晴らしい集会でした。2002年の檜森孝雄の日比谷公園での焼身自死を受けて、関西での、とりわけ京都での「5.30」記念日の集会は小さな規模ながらも続けて来しました。『水平線の向こうに』(2005年刊・風塵社)という本も無事に発行し、ようやくリッダ戦士たちへの弔いも本格的な形になったかなと思うのも反面、彼らと若き日々を共有していた私たち残された者たちの側の「なお言い足りない部分」について、35周年というときをポジティブに捉え返そうというモチーフが集会全体の暗黙の下敷きになっていたと言ってよいでしょう。

森本代表の心のこもった開会挨拶に続いて、司会の天野が次第を述べて、すぐに映画『赤P』を上映。映画終了後に、足立監督からのコメント。そのあと現在のパレスチナと世界を巡る政治・宗教・文化・経済にまで至る広汎な話題を足立正生・重信メイ・鶴飼哲の3名で自由闊達に語り尽くすことになりました。

- 足立「私がこの国を出てから二十数年して強制送還されるまで、この国は何も変わっていないと思った。しかし、若者が未来に何も夢をみることができなくなってしまった点で全く変わってしまった。そういう閉塞状況に至った責任は私たちにもある」
- メイ「日本では『平和ボケ』という言葉があるが、『平和ボケ』という状態はありませんね。平和は常に意識して作り上げていくもので

す。普通の社会ではみんな政治的立場、宗教などが違うのは当然であり、それを承知で仲良くいっしょにお茶を飲んだりごはんを食べたりすることが本当の平和ではないか。日本人は自分と異なる立場や生き方、差別や抑圧を視野に入れていないだけで、今の日本が決して平和な国だとは思えない」

- 鶴飼「今もなお大変厳しい状況にあるパレスチナの現状を通して見て、私たちが自覚しようがしまいが、結果として深く関与している東アジアの将来をも探り、なおかつ圧倒的な帝国主義と闘った獄中の重信さんたちとも、かつての老・中・青という意識的な部分の年代的結合であくなく連帯の道を今後も探っていきたい。」

ちなみに、鶴飼哲(一橋大教授)は、ここ京大西部講堂の自主管理が始まった頃の西部講堂連絡協議会のコアなメンバーでもありました。彼にとっても夢のようなイベントであったに違いないと思います。

実り多い白熱したディスカッションの後、いよいよ新曲『ライラのバラード』を引っさげたPANTAの登場です。遠くから駆けつけたファンも熱狂の拍手で彼を迎えました。ただ主催する側の私たちには、西部講堂が今、置かれている厳しい現状について前日まで把握できなかったこともあって、照明や音響の設備という点で、十分な環境が整備できなかったということが残念でしたが、PANTAとそのグループは貧弱な環境にも負けず完璧なライブを繰り上げました。

『オリオン頌歌第一章』を歌う途中で、大きく左手を挙げて「オリオンの三つ星」がある屋根を指さしたときは、まさに「鳥肌が立った」というファンも居ました。感動的な6曲の演奏のあと、満場の拍手に包まれて、「また会いましょう」とPANTAが熱いメッセージ。

壇上では変わって、田川副代表が「重信さんからの手紙」を読む・・・暗い会場で読みにくかったのだろう、旧友戸梶が舞台の裾で熱いスポットライトを素手で持って手助けしていたのが印象的でした。今、まさしく関

西はひとつになりつつあるという雰囲気。同時にカンパ袋が会場に回されてそして会の終了が宣言されると再び大きな割れんばかりの拍手の渦が巻き起こりました。

2. 熱い集会のあとで

スタッフ関係者と遠来のお客さまとの打ち上げの会場は、荒神橋の西たもとにある「くれない」でやることになり、なんと40数名もの結集で狭いお店は貸切状態になりました。荒神橋は2002年5.25の夜半に、天野が私のハンカチに包んで持って帰ってきた檜森の遺骨を散骨した思い出の場所です。

あとき、夜目にも鮮やかに舞い散っていく白い粉が川面に触れなるとすると、老アナキスト・故向井さんが信じられないほどの声を振り絞って「檜森くーん」と絶叫したのをただただ眺めていました。

席上、さまざまな立場のひとたちが今後ともこのような集会をもっともって関西でやったら良いとの発言が相次ぎましたが、とりあえず今回は何とか無事に終えることができました。若い学生さんたちも交えて肩を組み体を揺らして久々にインターを高らかに歌い解散しました。「次は10.21で会おう!!」と口々に挨拶しながら……

有料入場者(一般1,000円、学生500円)は合計146名で12万円強、その他一般からのカンパは41,000円超、ありがたいことでした。それにもまして息子の仲間でもある西部講堂連絡協議会とNDU(パレスチナと大阪長居公園の映画上映運動集団)の若者の皆さんには会場の設営や看板制作、近辺への情宣などで大変お世話になりました。このことは文字どおり世代を超えた交流ができたことで、この京都という場所での変わらない何かを感じさせる出来事でした。その他、有形無形のご協力をいただいた各方面にも深く感謝する次第です。以上かいつまんで6.3のご報告とさせていただきます。(文中敬称略)

『5.30 リッダ闘争35周年記念全京都メモリアル集会』実行委員会
(文責 原啓介)

関連記事等は以下

■ テルアビブ事件：あす、考える集会—京都大西部講堂 / 京都

72年5月30日、死傷者約100人を出し、日本赤軍の関与が明らかになったイスラエルのテルアビブ・リッダ空港襲撃事件から35周年を迎えるのを受け、3日午後1時、京都大西部講堂(左京区)で事件を考える集会が開かれる。

日本赤軍メンバーとしてレバノンで逮捕され、日本に強制送還後の昨年「幽閉者-テロリスト」を製作・監督した映画監督の足立正生さん、鶴飼哲・一橋大教授、日本赤軍元最高幹部、重信房子被告(1審・懲役20年、控訴中)の長女・重信メイさんを交えたトークショーを開催。最近の中東情勢を踏まえながら、当時、国外の政治活動の場へと学生たちが赴いた背景などを考える。

他に映画「赤軍-PFLP 世界戦争宣言」(71年)の上映なども。また集会を機に重信被告の社会変革へのメッセージをとらえなおそうと「重信房子さんを支える会(関西)」が発足する。問い合わせは同会(090・8536・9293)。

毎日新聞 2007年6月2日

※追記として

1972年5月30日は、はるか遠く、なんと35年前のことになってしまった。

言うまでもなく、絶望的な後退戦を闘っている中でも私たちが、まだ少しは反攻への意志を確認し合えた時代のことであるからには、自らの思いに殉教した故奥平たちの遺志にも論及せねばならないが、ここでは当時の私たちが彼らの行為を通じて何を感じたのかも、いつか同時に書き残しておかねばならないように思っていた。それゆえに今回の集会は、それまで京都で断続的に続けてきたごくごく身内での親しかった仲間を「偲ぶ会」というスタイルではなくて、一般の何も知らない若い世代も含めて再々再度の全体像の掘り起こしと検証という点に、あらためての意義を求めたものとなったのである。わざわざ西部講堂を選んだのは、そうした今日的な理由があった。現役の京大生で偶然にも西部講堂連絡協議会のメンバーである息子には、初めての父からの頼み事であった。彼には大学生になるまで、私の過去のことを語らなかつた。

5.30を京都でメモリアルにする直接のきっかけは、やはり2002年3月30日「土地の日」に、日比谷公園カモメの広場で、イスラエルのパレスチナ侵攻に激越な抗議文を突きつけて単身焼身自死した檜森孝雄の存在であった。この日まで彼がほぼひとりで悶々と抱え込んできた問題は、実は檜森がどう思っていたのかは別として、今も生き残っている私たちにとっても普遍的な問題であったと言っておかねばならないだろう。奇しくも偶然に生と死を別つ人間の思想的営為が共通の問題への精神の濃淡や単なる温度差などではないことを、檜森は身を以て訴えたのだと思っている。彼はきっと、あの日、桜の花見に浮かれる日比谷公園の大衆になんか訴えてはいない・・・あいつは私たちにこそ、自らの自決を通じて、頼むから次の展開を考えてくれという最後のメッセージを残したのだと私は感じていた。

葬儀に向かう新幹線の中で、後から後から流れ出てくる涙は、実際に代々幡葬儀場で黒焦げになってしまった檜森の骸を見たときにはもう潤れ果てていたのが今も口惜しい。でも、これが檜森の私たちに残した唯一の結論だったのだ。

周知のように、リッダ闘争の担い手はそれまで日本国内の最左派=武闘派を自認していた共産同赤軍派ではなかつた。当時の日常的な武装闘争が「何が何でも赤軍派だろう」という権力側からのフレームアップ傾向からすると、とても実像の掴みにくい在京都の学生ノンセクト・グループだった京都パルチザンという若い謎の反権力集団のことを歴史的に示さなければならぬ。そこに所属したメンバーの全てが組織労働者ではなく、ごく普通の学生・予備校生・元祖フリーターだったことをも。でも私は今も全員のその後を知らないままだ。

パルチザンというのは、もともとが「非正規軍」であるという以上の意味づけはなく、具体的に国内においては「赤軍=正規軍」、そしてそれを補完しつつ叛乱の下部構造を決定づける「無党派=パルチザン」という対比で語られたものであった。当時の私はこのことを称して「ノンセクト以上・党派未満」という言葉で勝手に解釈していた。この微妙な言い回しの中に当時の京都の運動が集約されていたように思う。自らのキャンパスからの出自として、ノンセクト=京都パルチザンから党派・赤軍派という他に類例を見ない希有な道を辿った私は、志願して晴れてようやく正規軍に合流したつもりであったが、もう当時は、党として何も機能していなかつたことを浅間山荘の事件の前後に思い知らされてしまった。『隊伍を整えなさい』という当時の重信さんのメッセージだけが何かを打開できるように感じたけれども、既に深刻な状況であった。少しだけ遅れて運動に合流した者だけが知る悲哀の重さは、それまでの新左翼運動の光と影のバランスを著しく欠き、これ以降は影のみが当時の社会に大きくクローズアップされることとなった。更に、日本の新左翼運動はここで致命的な歴史を背負わされたということに収束されていった。

そうなると、実はこうした影の部分として語られる、国内での連赤に次ぐ国際的「武装闘争」とされる5.30リッダ闘争の性格については、当時の国内に残っていたグループの思想の地平に接ぎ木をしたようなものではないということだけは直感的にでも書き残しておかねばならないような

気分が襲われるのである。

主戦場からの退場を余儀なくされつつあった学生戦線の中から、新たな国際根拠地を求めて、困難な国内運動の打開を図ろうという気運は当時の京都では既に支配的な雰囲気であった。キューバもアラブもヨーロッパも、そして北朝鮮すらも、それら活動家達の射程にあったことは間違いがない。唯一アメリカだけは誰も目指さなかったのだろう。今から思えば、かなり高い旅費とパスポートさえ用意できれば、誰でも革命とその思想を輸出する兵士になれたはずだった。それら兵士は全て志願兵であったことは言うまでもない。

檜森の自決の後日、5.25をもって、ただただ悲しくて京都での京大会館追悼集会を呼びかけた私のもとに、あの頃自分も秘密裏にアラブへの無差別「徴兵」勧誘をされて、とても不愉快で即座に断ったというひとからの激越な文章が回ってきた。彼は何の遠慮もなく、仲間だった檜森も、奥平も安田も全員が「犬死に」だったとメールで断言していた。そして「あんな運動は軽蔑しているから」追悼集会には断固として参加しないという。彼は残念にも「原因と結果」のみを今もって重視している。果たしてそんな自明の時代に私たちは生きていたのだろうか。言うまでもなく、その彼とはその時点で義絶する他はなかった。彼には死を賭してまで異国の死地に赴くという覚悟がなかったというよりも、そうまでして追いつめられていた私たちの運動の行方に関与したくなかったというエゴを感じたからであった。まして、リッダ闘争に臨んだ愛すべき仲間の心情に対しての究極の想像力が欠如していると判断したからだ。誰しもあの時代、自らのエゴを抱えて運動なんかできる訳がなかった・・・嫌だったら断ったらいいのだ。ひとの死の直後に尊敬も軽蔑もないだろうと思った。

死は厳然として、誰をも永遠に別つ強力な事態ではあるけれども、私の心の中には今も京都時代の檜森や奥平の笑顔だけは残っている。ひとの生死には、誰の批評も許さぬ物語があり、残されたひとびとは各々が意味付与

するだけでよい。それでもなお、私は、かつての連帯の証として、今一度でも彼らの肉声に再び出逢ってみたいのだ。かつて明るく闊達とした京都の無名で元気の良かった学生達の煌めく人生を彷彿とさせるストーリーがあり、その後の展開が、やはり悲しいままでは納得が行かないのだから・・・

「ワイワイ短歌」コーナー

次号から新設します。短歌(5・7・5・7・7)に限らず、俳句(5・7・5)、川柳(5・7・5)何でも結構です。奮って投稿してください。作品に対して重信さんの感想もあれば、連ねての短歌ありと、心豊かな遊びのコーナーです。

重信さんは何ら特別の経験も予備知識もないところから、独力で短歌を始められ、5年も経たない間に、数千首の短歌を詠まれ、一昨年、ご存知のように歌集「ジャズミンを錠口に」を出されました。ここは一つ、重信さんに追いつけ、追い越せの意気込みで取り組んでみようではありませんか。テーマは「さわさわ(共に一緒に)」、「家族」、「政治批判」とします。もちろん、テーマにこだわらず、自由題で、何でも詠んで下さってかまいません。一トでも多くの方の投稿をお待ちしています。

塀を越えて、歌声を届けよう

贈ります、この一曲

民衆の歌・抵抗の歌・闘いの歌

① 『幸せつくろう』

大阪のある小学校で、8月6日、原爆の日に、平和のための催しがあります。「平和と人権を考える夕べ」というタイトルで、毎年、学校の生徒・保護者、先生、地域の人たちが夏休み中の学校に集い、半日をすごします。食べ物・飲み物の模擬店から写真展、ライブコンサート、最後にはみんなで盆踊りと、手づくり感いっぱい祭りですが、私は縁あって毎年この祭りに寄せていただき、もう10年以上になります。

私はかつて、大阪で、ホルモン焼きの屋台をやっておりました。渡慶次恒徳さんという沖縄出身の私の父親と同じ年頃の方がおられて、私の大の親友で、恩人でもありました。その渡慶次さんの世話で私はホルモン焼きの屋台をやリ、沖縄民謡をこなく愛しておられた渡慶次さんの影響で沖縄民謡を習い、屋台で三線片手に沖縄民謡を歌うようになりました。

私の店は、客層はと言えば、ママの自転車の荷台に乗せてもらってやって来る二歳の男の子から、お買い物車を押して、市場への行き帰りに寄って下さる90歳のおばあさんまでと、とても幅広いものでしたが、子供たちに大人気で、小学生、中学生が大勢押しかけ手くれました。子供が小遣いで買える、一つ50円というような値段でしたから。

不登校の子供たちが毎日やってきて、先生が探しに来たり、様子を聞きに着たりしておられました。私は屋台に来てくれる子供たちと一緒に紙芝居をやったり、人形劇をやったりして楽しんでおりました。すると、子供たちが、学校の運動会で、ホルモン焼きの屋台を作ったと報告してくれました。そんな私に、屋台の近所にある小学校の一つから沖縄民謡を歌いに

きませんかというお誘いがありました。

ホルモン焼きのお店も出してくださいと言うことで、私は喜んで出かけました。それが、「平和と人権を考える夕べ」というお祭りに、私が寄せてもらうようになった最初です。丁度、阪神淡路大震災直後で、沖縄から日本の平和を考えるとということと、阪神淡路大震災をテーマとして掲げておられました。

2000年、この年、55歳の私は、再婚し、それを機に15年間続いた屋台を閉じ、郷里に帰りましたが、それから毎年この、平和祭に呼んでいただいています。再婚したつれあいは、似顔絵描きなので、似顔絵コーナーもでき鈴なりの子供たちで大人気です。今年も二人の娘ともども家族4人で寄せてもらいました。

音楽のライブコンサートは、中学校ブラスバンド部の演奏あり、教職員バンドありとバラエティに富んでいます。年によると、若い女性がボーカルを務める地元のロックバンドが迫力満点の歌を聞かせてくれたり、そうかと思うと、秋祭りのときに繰り出す山車の、山車囃子を演じてくれたりしたこともありました。お客さんは大喜び、やんやの拍手、大喝采です。学校という場でこのような音楽表現が見られることは、とても、スリリングで新鮮でありました。

その中で、毎年欠かさず出演、元気一杯の歌声を聞かせてくれるのがこの、生江識字学級の皆さんです。被差別部落出身の人や、在日朝鮮人、そのほかにも、日本語を学ぶ機会がなかった人たちがおられます。そのような方たちが、日本語学習に取り組んでおられる場があります。、それが識字学級です。生江識字学級の皆さんは、毎年このコンサートで二曲歌ってくださいます。今年も二十数名の方が舞台上に立って元気な姿を見せてくださいました。

曲名は、「幸せつくろう」と「城北の池は火につつまれて」で、「城北…」は空襲を受けた戦時中の体験を歌にして戦争反対を訴えるものですが、今回贈る曲としては「幸せつくろう」を選びました。識字学級のみなさんの歌声が耳に届くようにと願いをこめて。

編集後記「重信房子さんを支える会(関西)」が、今年、2007年6月3日に発足して3ヶ月、ようやく会報「さわさわ」創刊号をこうしてお届けすることができるようになりました。本当かなと、まだ信じられない気持ちです。ですが、確かなことはとても大勢の方々のご協力、お力添えがあってこの会報が誕生したということです。まずは御礼申し上げます。／タイトル「さわさわ」は皆さんに喜んでもらえるのではないかと思います。これに決まるまでにはいろいろ紆余曲折があり、重信さんご本人と、名前をあげることはいたしません、重信さんを支える周囲の方々心が砕き、思いを持ち寄り、選んでくださいました。ですから、このタイトルはそれ自身、一つの作品、共同制作の作品であるとぼくは思っています。この会報が進むべき航路を良い方向に導いてくれそうな、そんな響きが聞こえるようなイメージがあります。／「オリーブの樹」には負うところ大きいものがあります。「オリーブの樹」があるからこの会報は生まれることができました。「さわさわ」は「オリーブの樹」のいわば弟分です。我が儘で、甘えん坊なところは、弟分にありがちな性としてご寛恕いただきたいと存じます。願うところは重信房子さんを支える人の輪がより広がること一事であり、「さわさわ」は「オリーブの樹」の裾野を広げるべく大いに貢献するであろうと意気込んでおります。／「さわさわ」は年4回の刊行を目論んでいます。次号第2号は12月発行の予定です。重信さんへのお便りや詩・散文等、投稿大歓迎です。11月末を目途に送ってください。

販売は一冊300円です。なるべく年間購読をお願いします。送料等込みで、年会費は2000円です。(郵便振替口座 00920-2-169764 さわさわの会)

連絡先一〒635-0061大和高田市磯野東町3-27 森本忠紀

tel/fax 0745-22-4002 mail : toppinsyan@kpa.biglobe.ne.jp